史料紹介

寛龍侯の書簡（更に新発見）

佐伯文庫本管理について、きびしいお叱りのこと ―（女島 岡將家蔵）―

読解 羽柴 弘

去る八月二十四日、女島の岡將家夫人より連絡をいただき、佐服氏と二人して参上した。

まず「正平六年」の銘ある岡將家重代の甲冑、芭蕉の馬印、「天正十九年」の朱印文書、その外彩しい文書、書画である。その中に毛利高範侯の書簡が交っていたので抜き出し、夫人に乞うてその読解を約束して借り受けていたので、慈上に掲げて皆さんにも紹介したい。（尚岡將家に関する拝見した資料については、後日更に特聞をかけてまとめたいと考えている。）

次に掲げる高標侯の書簡は、側用人として仕えていた岡將家七代八右衛門に宛てたものである。

今日下川茜□より申聞候は蔵書の中に虫入候本有之候間　此中ほし置候旨申候少へ取寄置候延書物の間に生き候虫有之候　□□千候事に御座候　一枚にても相改千可申延無其儀　等閑なる取計難心得候　諸□□存候事も無之当四日比出候の由相□□日寄ヲ五郎取計可申延異覚書物ヲ

蔵書、即ち書物蔵の中の虫に虫が入ったので干した、と聞き、

取寄せて見たら書物の中に生きている虫が居た、一枚一枚改めて、

等閑（なおざり、放置）の取計らい、心得難く候―と大変なお叱り、

（、、、は筆者付ける）

厳敷二存候、故、右躰の事、起候　不埒に存候

右之趣家老共に申達し□五郎呼出　急度可申聞候　外書物奉行も呼出　右之次第具に申聞　厳敷ナル儀以後堅く無之様可申渡候　尤此已後は家の外に書物奉行共一人ッツ書蔵に相詰日夜無解怠心を附候様申付候間此段も家老共へ□□急度申渡候様　可申聞候□□□申聞候

閏七月六　　側用人共へ

（後略）

佐伯藩第八代高標侯が、学問好きの殿様であって、佐伯文庫本八万冊を集められ、その本を大事にされたことは有名である。秀麗で江戸に在った時も度々国許に手紙を送って、虫の入らぬ様樟脳を入れよとか、火の用心をせよとか、いつも丁寧に、頼むように言いよこしていた。

ところがこの手紙は、手許に取寄せた本の中に、実際生きた虫が出て来たというので、国元の側用人（岡將八右エ門）を通して、家老及び書物奉行に対するきついお叱りであり、今後の管理態勢への指示である。

明和・安永・天明・寛政とつづいた凶作や天災、飢饉に苦しむ農民からの年貢の取立て、藩庫を傾けるようにしての佐伯文庫本の購入、八万冊という大量の集書をなしとげたのである。時にはこんなきびしいお叱りもあったこと、むしろ当然考えられることである。

高標というお方は、こんな厳しい人でもあった。（終）

大変なお叱りの言葉、家老共にも言え、書物奉行も呼出して右のことくわしく伝へ、厳敷（厳重）な取扱ここの後は二度と無いよう申渡す、書物奉行は一人宛書蔵につめて、怠りなく心をつけるよう、きっと家老共にも急度（強く）申し渡すよう。

寛政九年　閏七月